

# 「合水堂治験」, 「華岡家治験図巻第三」および 「春林軒奇患図」の3図巻に披見される 症例の比較検討

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成29年2月22日／受理：平成29年7月13日

**要旨：**これまで知られていなかった「合水堂治験」(2巻)を紹介した。合水堂の華岡南洋が診療した13症例の22図を描いた図譜である。1例を除いて手術時期の言及がない。これまでに知られていた「春林軒奇患図・北里本」とは3症例の6図が共通する。「合水堂治験」では、麻酔に関連した語句が10回使用されており、「通仙散」の名称は1回のみで、残り8回は「麻沸湯」、「麻沸」は1回であった。このことは合水堂において麻酔薬を「麻沸湯」あるいは「通仙散」と呼称していたことを示している。合水堂における華岡南洋による医療の実態をある程度明らかにすることが出来た。

**キーワード：**合水堂治験, 華岡南洋, 合水堂, 通仙散, 麻沸湯

## はじめに

華岡青洲(以下「青洲」と略)の医学を理解する上で、外科手術のような「術」に関しては、文章のみでは青洲が意図したところを正確に理解することは必ずしも十分でない。青洲自身「吾が術は、心に得て手に応ず。口言う能わず。筆書く能わず。」<sup>1)</sup>と常々門人に教え諭しており、文章のみでは術を伝達する上で十全でないことを明確に認識していた。この事を考慮すると、青洲の医学を研究するためには、手術方法を描いた図や患部を描いた図譜は極めて重要な意義を有する。

著者は、さきに、春林軒で行われた手術を描いた「春林軒奇患図」に関連して、国内外の施設に所蔵されている18種の図譜を対象に検討して、その起源や系統を明らかにしたが<sup>2)</sup>、大坂の合水堂で描かれた図譜については、「合水堂奇患図」<sup>3)</sup>として名前だけは知られていたものの、具体的な情報がなかったので全く言及することは出来なかった。今回、同類の一写本を実見することが出

来たのでその概要を報告し、前稿の補としたい。

## 1 春林軒と合水堂の代表的な図譜

門人佐藤持敬が編纂した「華岡氏遺書目録」<sup>4)</sup>は「春林軒奇患図」と「合水堂奇患図」の二図譜を掲げている。前者は、呉が青洲直系の子孫「華岡貞次郎君」所蔵の「正本」としていることから、呉のいう「華岡家治験図巻第一」と考えられ、主として春林軒における手術82症例の図を収めており、呉がその概要を示したが、図はすべて省略されている<sup>5)</sup>。しかし、図の殆どが「南紀徳川史」<sup>6)</sup>の中で彩色ではないものの、覆刻されているので大要を知ることが出来る。とくに最初の全身麻酔の施行例である藍屋 勘の乳癌腫瘍摘出術に関しては、図が描かれた当時の状況が著者の最近の研究によって明らかになった<sup>7)</sup>。

一方、大阪の合水堂の症例を扱った後者の「合水堂奇患図」については「華岡氏遺書目録」<sup>4)</sup>は「上巻柳田意斎輯。中巻友人出羽細谷米山輯。下巻佐藤敬輯。」と記しているだけで、その内容は

全く不詳であり、現在その所在も知られていない。呉は「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>として、呉が著書を執筆した当時、華岡乙平が所蔵していた一図巻を紹介し、29症例の診断名や患者名を示して「合水堂奇患図」の一種としたが、もちろん図は省略されて示されていない。

## 2. 呉による「華岡家治験図巻第三」について

以下に紹介する「合水堂治験」と比較するために、呉が紹介した合水堂の奇患図について説明する必要がある。まずこれについて解説する。呉はその著「華岡青洲先生及其外科」の第三巻の第二「青洲先生治験ノ図巻」において春林軒に伝えられていた諸種の図巻を紹介しているが<sup>9)</sup>、その三番目に「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>を示して「華岡乙平君ノ所蔵ニシテ。主トシテ華岡南洋先生ノ治験ニカ、ルモノナリ。前記華岡氏遺書目録中ニ合水堂奇患図ト云フモノ恐ラクハ此一種ナルベシ。」と解説している。題名、巻数、丁数、書写者、書写年などの書誌的事項は不詳である。この記述に従えば、呉は当時、華岡乙平の所蔵する図巻を実見して、このように記した。春林軒に所蔵されていた「合水堂奇患図」は、前述したように「華岡氏遺書目録」<sup>4)</sup>によれば「上巻柳田意斎輯。中巻友人出羽細谷米山輯。下巻佐藤敬輯。」とある。呉は「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>を「合水堂奇患図」の「一種」としているから、明らかに両者は題名も含めて、内容的にも異なることを認識していたことになる。「合水堂奇患図」は3巻であるが、華岡乙平所蔵の図巻は巻数も異なっていたのかも知れない。

比較のため呉の記述に従って、以下に「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>に披見される29症例の診断名、患者の出身地、患者名、年齢、手術日などを抄出する。上述したように図は示されていない。頭書の番号は呉による。

- (1) 上顎癰 摂州尼崎藩中 大木田仁左衛門 年三十二
- (2) 其二 全形の図。天保十三寅年二月十三日療<sub>レ</sub>之

- (3) 肉瘤 芸州広島 諫活郎 行年二十八
- (4) 其二 瘤塊全形の図。天保十三寅年四月十九日 右側腫瘍摘出 五月中旬 左腫瘍摘出
- (5) 顔面及び頸部の縫合中の図
- (6) 同上 (左右側頸部) 縫合後の図
- (7) 血瘤 難華淡路町難波橋筋西入北側 大和屋与兵衛 行年十八
- (8) 其二 全形の図。天保十三寅年五月十九日 診<sub>レ</sub>之而後経<sub>二</sub>十日<sub>一</sub>死
- (9) 石淋 浪花上町雪蹈屋町 敦賀屋嘉助児 行年十二 天保十三寅年七月六日療<sub>レ</sub>之
- (10) 鼻痔 浪華玉造撞木町 大和屋半兵衛娘 行年十七 天保十三寅年九月十日療<sub>レ</sub>之
- (11) 肩風 播州高槻領野田村 和吉 行年二十九 天保十三寅年八月九日療<sub>レ</sub>之
- (12) 反花瘡 摂州高槻領志室村 武兵衛 行年四十八
- (13) 其二 全形の図。天保十四卯年二月二十九日療<sub>レ</sub>之
- (14) 浪華長堀白髪橋西詰西側 大工堺屋長七 行年二十八 天保十四卯年五月十五日 自誤刺<sub>二</sub>脈所<sub>一</sub> (「告以<sub>二</sub>不治<sub>一</sub>」とあるから、手術は行わず、対症療法のみを行った。二十日余で全治した。)
- (15) 血痣反花 浪華南堀江四丁目橋通 兵庫屋重兵衛貸家阿波屋徳兵衛 行年二十八天保十五辰年正月十九日療<sub>レ</sub>之
- (16) 脱疽 本州津高郡菅野村 一農夫 年二十二 嘉永甲寅正月四日 辞不<sub>レ</sub>治 (「辞して治せず」とあるから、手術は行わなかった)
- (17) 脱疽 本州和気郡日笠村 農夫 歳三十六 嘉永甲寅正月十五日療<sub>レ</sub>之
- (18) 畸形児 (胸骨部融合児) 讃州蓑浦 漁婦 嘉永癸丑六月十二日 (稀有な奇形の症例なので記述したが、手術の対象ではなかった。)
- (19) 畸形児 (無頭性頭部胸部融合児) 本郷 商家婦 嘉永癸丑十一月二十六日 (稀有な奇形の症例なので記述したが、手術

の対象ではなかった。）

- (20) 大包莖 浪華南久宝寺町三休橋筋西入 河内屋久兵衛 行年二十九
- (21) 其二 天保十二丑二月五日療之
- (22) 陰瘤 備中板倉駅 牛鋤屋一婦 年二十四
- (23) 鎖陰 兵庫宮内町 伊勢屋藤兵衛娘 嘉永元申三月二十日截之
- (24) 鎖瘤 浪華島之内南綿町 伊丹屋儀兵衛内室 弘化丁未三月十三日截切
- (25) 截断の跡縫を缝合する図
- (26) 陰瘤
- (27) 陰瘤
- (28) 陰瘤
- (29) 陰瘤
- (30) 肉瘤 新町越後町 山城屋某婦信 文久改元辛酉春三月二十四日截断之
- (31) 右瘤全形の図
- (32) 右瘤全形の図
- (33) 腫瘍の図 本州和気郡塩田村 農夫林蔵の妻 三十六 嘉永甲寅正月十二日療之
- (34) 腫瘍の図 (女子の纖維腫) 文化乙亥丁丑 (難波立憲が親写した図)
- (35) 腫瘍の図 (女子の纖維腫) 文化乙亥丁丑 (同上)
- (36) 腫瘍の図 (女子の纖維腫) 文化乙亥丁丑 (同上)
- (37) 腫瘍の図 (女子の纖維腫) 文化乙亥丁丑 (同上)
- (38) 翻花瘡 大阪心齋橋筋塩町通 袋物屋半兵衛 年四十六歳
- (39) 半陰陽 肥前唐津 瀬戸物問屋業者倅 十七歳

項目として掲げられているのは39であるが、同じ症例の摘出腫瘍の図などが「其二」や「同上」として番号が付されているので、症例数としては29例である。(14), (16), (18), (19)の4例は手術が行われていないので手術例は25例である。(39)も手術が行われたか否か明確でない。この中で患者の名前、出身地が判明しているのは17例である。手術の期日が明らかな症例はその中の

14例で、最も古いのは(20)の「天保十二丑二月五日」、最も新しいのは(30)の「文久辛酉三月二十四日」である。もっとも(34)–(37)は、呉によれば、これらの図と説明は難波立憲<sup>10)</sup>が華岡鹿城に師事していた時の症例であり、華岡南洋の扱った症例でないから、ここでは除外した。これらの難波による4症例は合水堂で行われた手術であり、同所に保存されていた図であるから、模写されてこの図譜の中に収められたのであろう。以上の手術例の中に10歳以下の小児例は含まれていない。死亡例は(7)の1例のみで、術後10日で死亡した。

### 3. 「合水堂治験」について

大阪市史編纂所所蔵の中野 操文庫に「合水堂治験」と題する2巻本の写本が所蔵されている。大きさ23.6×16.5cm、四ツ目袋綴。表紙は薄鼠色で題箋が付されていた跡があるが、他に文字は書かれておらず、見返しにも文字は記されていない。上巻は26丁で、1丁表に「合水堂治験巻之上 南洋華岡先生 門人南豫松府 西崎光松柏輯」が3行に記され、下巻は20丁で、1丁表に「合水堂治験巻之二 南洋華岡先生 門人南豫松府 西崎光松柏 輯」と同じく3行に記されている。これら2巻は四周双辺で有界。半丁は9行。図の丁では無界。版心に「治験巻 香祖館蔵」とある。内題に「巻之上」、「巻之二」とあるが、便宜上、以下「巻之上」、「巻之下」と記す。編集者の「西崎松柏」は「華岡青洲先生春林軒門人録」の伊予の部に見られる「同(文政)十三、十一、二十六松山 西崎松柏」である<sup>11)</sup>。「南洋華岡先生 門人」とあるから、合水堂に入門した門人である。症例報告の文章の後に図が示されているが、彩色の図が描かれた丁は四周双辺無界で、画家による洗練された図ではない。

以下に「巻之上」、「巻之下」に記述されている各症例の概要と図について簡単に記述する。「巻之下」の冒頭の症例を除いて、手術が行われた期日についての記述は全くなく、説明文の末尾に、術後投与された内用剤と軟膏が記されている。頭

書のかっこ付の番号は著者が便宜上付したものである。

「卷之上」

症例1. 1丁表-2丁裏：大坂久宝寺町 戎屋治兵衛妻 年四十（以下、1丁半の説明文が続く）妊娠三、四カ月時に歯痛を覚え、南洋の治を求めたが、放置していた。年を越えてから、再び南洋を訪れて治を受けた。径四寸の歯肉腫瘍になっており、根元を結紮して七日目に自然に脱落。手術せず。妊娠の経過については言及されていない。八物湯と後衝膏が使用された。

3丁表：顔の図（図から判断すると腫瘍の径は四寸ほどあるようには見えない。）

3丁裏：空白

症例2. 4丁表-5丁裏：丹波亀山 丸屋忠右衛門（以下、1丁5行の説明文が続く）右眼瞼部の「眼胞菌毒」。通仙散を与えて病巣を切除。術後、大紫胡加石羔湯、涼膈清脾飲、破敵膏が用いられた。

5丁裏：空白

6丁表：手術前の図

6丁裏：手術後の図（手術は眼球に及んでいない）

症例3. 7丁表-7丁裏：河州交野郡私一村 農夫 與左衛門一孩 一歳零四箇月（以下、1丁の説明文が続く）鼻尖端の血瘤 軟膏を貼布して治療。手術せず。大連堯飲、家秘拔毒散が投与された。

8丁表-8丁裏：空白

9丁表：手術前の子供の顔の図

9丁裏：空白

症例4. 10丁表-10丁裏：播州綱干 農夫與右衛門（以下、半丁の説明文が続く）右前腕の火傷後の肉芽（説明文には「右手」とあるが、図では「左手」）麻沸湯を与えて肉芽を切除。手術日不明。術後、八物湯、后衝羔が用いられた。

11丁表：手術前の前腕の図

11丁裏：空白

症例5. 12丁表-12丁裏：浪花新街 河内屋某婦子（以下、半丁と2行の説明文が続く）外陰部の梅毒瘡 麻沸湯を与えて切除。手術日不明。術後、大解毒湯、后衝膏が用いられた。

13丁表：手術前の外陰部の図

13丁裏：空白

症例6. 14丁表-15丁裏：摂州東成郡森小路村 浅田屋弥十郎僮平吉 年十三（以下、1丁と3行の説明文が続く）腹（「腹」の誤）蛇による右手の咬傷。すでに脱疽のようにになっていたが、上腕下端の腐肉を切除。麻沸湯を用いたか否か不明。手術日不明。術後、十全大補湯、破的膏が使用された。

15丁裏：空白

16丁表：脱疽状になっている右上肢の図

16丁裏：前腕中央で橈骨と尺骨が見える右上肢の図

症例7. 17丁表-18丁裏：角觚湊灘右衛門（以下、2丁の説明文が続く）項部の膿胞。穿刺し切開したが、次第に悪化して死亡。麻沸湯を与えての切除はせず。托裏消毒散飲、神功内托散、十全大補加荆芥湯、伯州散が投与され、破敵膏、先鋒膏が用いられた。

19丁表：治療前の膿胞の図

19丁裏：切開後の膿胞の図

20丁表：進展した膿胞の図

20丁裏：空白

症例8. 21丁表-21丁裏：摂州嶋下郡別府村 農夫與右衛門（以下、1丁半の説明文が続く）右足甲部より尖端の脱疽。麻沸湯を与えて、拇指を残して右足の外側部分を切除。術後、千金犀角湯、半夏瀉心湯が投与され、破敵膏が使用された。

22丁裏：空白

23丁表：手術前の右下腿の図

23丁裏：手術後の右下腿の図

症例9. 24丁表-25丁裏：大坂玉造 斎藤市太郎 児 生後14日（以下、1丁半と2行の説明文が続く）缺唇に対して無麻酔で手術。治療中、甘連湯、蟾酥、速斂油、家秘螞蝗膏、無名異、二番膏、紫雲膏が使用された。



25 丁裏：空白

26 丁表：手術前の缺唇の図

26 丁裏：手術後の缺唇の図

#### 「巻之下」

症例 1. 1 丁表-9 丁裏：石州邇摩郡波積村 農夫 健助妻 十七歳（以下，9 丁の説明文が続く）死産に際して，膀胱陰瘻を患う。備前金川の難波立息の診察を受けたが，治療不可とされた。8 年後，南洋の診察を受け，麻沸湯を与えて「五月十日」（年紀不詳）に瘻を切除。弘化三年正月妊娠したが，十月に死産。その際，前回の手術時の創口も拡大したが，放置。嘉永 6 年再び南洋の診察を受け，5 月 10 日に麻沸散を投与して手術を受け，7 月に治癒して帰郷。術後，当四加荊芥湯，前衝膏，紫雲膏を使用した。

10 丁表：手術前の膀胱陰瘻の図

10 丁裏：手術中の膀胱陰瘻の図

11 丁表：手術後の膀胱陰瘻の図

11 丁裏：空白

症例 2. 12 丁表-13 丁裏：江州坂田郡堂谷邨 油屋新右衛門 年六十（以下，1 丁半の説明文が続く）下唇の翻花瘡 瘡の根元に針を掛けて結紮して，六日後に瘡は脱落。手術的に切除はせず。大黃牡丹皮湯加薏苡仁を与え，後衝膏が使用された。

14 丁表：治療前の翻花瘡の図

14 丁裏～16 丁裏：空白

症例 3. 17 丁表：乳癌の図（説明文がない）患者名，手術時期などの詳細は不明。

17 丁裏：乳癌手術中の図

18 丁表-19 丁裏：空白

症例 4. 20 丁表：男子尿道切開の手術の図（説明文がない。）患者名，手術時期などの詳細は不明。

20 丁裏：空白

以上簡単に記してきたように，「巻之上」では 9 症例，「巻之下」では 4 症例，合計 13 症例が記述され，計 22 図が描かれている。しかし「巻之下」

の症例 3 と 4 については，説明文を欠いているので，出身地，患者名，診断名などの詳細は知られていない。

症例数は 13 例と少ないものの，これまで余り知られていなかった合水堂における外科治療，特に華岡南洋の外科の解明に資すると思われる。さらに第 5 節で詳述するように，麻酔薬の名称「麻沸湯」，「通仙散」についても重要な知見を提供するものである。

#### 4. 「華岡家治験図巻第三」，「春林軒奇患図」と「合水堂治験」に披見される症例の比較

呉が実見した「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>には図が描かれていたのであるが，呉の記述だけでは具体的なことは分からない。例えば，その中の（7）の死亡例であるが，呉は以下のように記している。この記述だけでは「血瘤」の部位はどこであるか，手術してから死亡したのかどうか判然としない。

血瘤 浪華淡路町難波橋筋西入北側 大和屋与兵衛 行年十八

其二 全形の図。天保十三寅年五月十九日診之而後経二十日死

著者の研究によれば，これまでに知られている諸種の奇患図の中で，合水堂における症例を最も多く収載している図巻は，北里大学東洋医学研究所図書館所蔵の「春林軒奇患図」（以下，混乱を避けるために「春林軒奇患図・北里本」とし，この「下巻」を「春林軒奇患図・北里本・下巻」と略）である<sup>12)</sup>。この中に「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>と共通する症例が少なからず見出される。この「春林軒奇患図・北里本・下巻」<sup>12)</sup>によれば，上記の「血瘤」は右前胸部の巨大な血管腫で切除されたことが判明する。そうすれば，死亡の原因は手術による多量の出血に原因する貧血によると推定される。

そこで，この図巻から「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>と説明文が殆ど同じである症例を選び出すと次の 10 症となる。名前，出身地の順序で記し，頭の

( )内の数字は「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>と同じ番号を採用した。半丁に描かれている図を以って1図とした。末尾の( )内に著者の注を記した。

- (1) 膈瘍 摂州尼ヶ崎藩中 大木甲二左衛門 年廿二 (口腔内の腫瘍) 2図
- (3) 肉瘤 芸州広島 諫活良 行年廿八 (左右の頸部) 2図
- (7) 血瘤 難波淡路町難波橋筋西入北側 大和屋与兵衛 行年十八 2図
- (9) 石淋 浪花上町雪踏屋町 敦賀屋嘉助 行年廿二 1図
- (10) 鼻痔 浪華玉造種木町 大和屋半兵衛娘 行年十七 1図
- (15) 血痣反花 浪花南堀江四丁目橋通 兵庫屋重兵衛貸家阿波屋惣兵衛 行年廿八 1図
- (20) 大包茎 浪久南久宝寺町三休橋筋西入 河内屋久兵衛 行年廿九 2図
- (23) (鎖陰) 兵庫宮内街 伊勢屋藤兵衛娘 1図
- (24) (鎖瘤) 浪華島之内南綿町 伊丹屋儀兵衛内方 2図
- (30) (肉瘤) 新町越後町 某家 (右肩甲部の径20cm程の腫瘍) 2図

以上によって「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>に示された29症例の内、10症例の図を復元できたことは大きな進歩であるといえる。「春林軒奇患図・北里本・下巻」<sup>12)</sup>中の名前、出身地、手術(治療)期日は、細かい点で「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>の記述と異なる点も散見するが、診断名などの重要な点で齟齬はない。

##### 5. 「華岡家治験図巻第三」, 「春林軒奇患図・北里本・下巻」と「合水堂治験」に共通する症例

以上述べたように「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>と「春林軒奇患図・北里本・下巻」の間には共通する10症例が存在するが、「春林軒奇患図・北里本・下巻」と「合水堂治験」の間に共通する症例はわずか3例である。「合水堂治験」の「巻之上」(3)農夫與左衛門一孩(巻之上, 9丁表), 「巻之

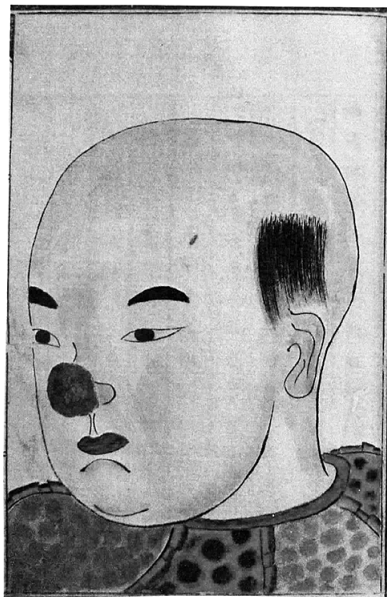


図1 「合水堂治験」の「巻之下」(9丁表)の図  
(大阪市史編纂所の許可を得て転載)

下」の(1)農夫健助妻(巻之下, 10丁表-11丁表), (3)患者名不明(巻之下, 17丁表, 17丁裏)で, それぞれ「春林軒奇患図・北里本・下巻」<sup>12)</sup>の18丁裏, 14丁表-15丁表, 15丁裏, 16丁表の図に相当するが, この図巻には説明文がない。参考のため, 図1に「合水堂治験」の「巻之上」(3)の図, 図2に「春林軒奇患図・北里本・下巻」<sup>7)</sup>の18丁裏の図を示す。色彩など些細な点は異なるが, 同一症例を描いたと見做してよい。しかし「華岡家治験図巻第三」と「合水堂治験」との間に共通する症例はない。

以上のことから, 次のようなことが言えるのではないと思われる。合水堂には各種疾患の患部やその手術後の創部を描いた一群の図が保存されており, 編者がその中から任意に選択して図巻を編集した。複数の図巻が作製された正確な理由を直ちに明らかにすることは出来ないが, 将来手術を行うための資料としたこと, 郷党の人たちに春林軒で学んだことを示す具体的な証拠としたことなどが考えられる。詳細は知られていないものの, 柳田意斎, 細谷米山, 佐藤 敬の3人の編者によって最も多くの図が収載されたのが「華岡氏

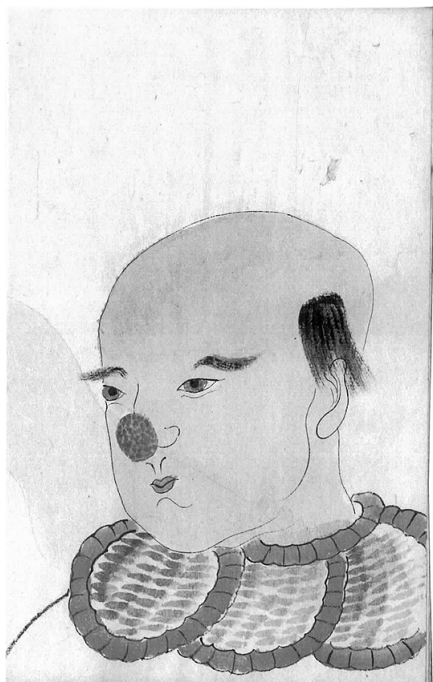


図2 「春林軒奇患図・北里・下巻」18丁裏の図  
(北里大学東洋医学研究所図書館の許可を得て転載)

遺書目録<sup>3)</sup>の伝える「合水堂奇患図」ではないかと推察される。これとは別に、症例が共通しているか否かは全く不明であるが、44症例の図を模写して製作されたのが「春林軒奇患図・北里・下巻」<sup>7)</sup>であり、29症例を抽出して描かれたのが「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>、そして13症例を描いたのが「合水堂治験」である。「春林軒奇患図・北里・下巻」<sup>7)</sup>と「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>に共通するのは10症例である。「合水堂治験」は13症例と収載されている症例が少ない上に、「春林軒奇患図・北里・下巻」<sup>12)</sup>と共通する症例が3例と少なく、しかも「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>と共通する症例が皆無であることを考慮すれば、異なった時期に編纂されたことも考慮される。この意味で「合水堂奇患図」の内容を知ることが出来れば、合水堂関係の図譜の全体像や合水堂における華岡南洋の外科治療の解明が一層進展すると思われる。

## 6. 「華岡家治験図巻第三」，「春林軒奇患図・北里本 下巻」，「合水堂治験」に見られる全身麻酔薬の呼称について

春林軒における医療のみならず，合水堂における医療においても，華岡流の医術を特徴付けるのは全身麻酔下での各種手術であった。したがって，全身麻酔薬の問題は華岡流の医術を考える上で極めて大きな意義を有していることが理解される。華岡流の医術については，未だ不明の点が少ないが，その一つが全身麻酔薬の呼称に関することである。

青洲が開発した全身麻酔薬を「麻沸散」と呼称したにも拘わらず，呉がその著書の中で「通仙散」を繰り返し用いたために，青洲の用いた全身麻酔薬は「通仙散」であり，その別名が「麻沸散」であるとする誤った説がわが国では普及した<sup>13)</sup>。著者はこの呉の説に疑問を覚え，調査した結果，青洲自身とその高弟はいずれも「麻沸散」ないし「麻沸湯」と唱え，青洲没後，合水堂関係者によって「通仙散」なる呼称が唱えられたことが判明した<sup>14)</sup>。

本稿で対象としている史料では，全身麻酔薬の名称がどのようになっているか検討した。

「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>は以下の2例において全身麻酔薬の名称が披見される。

- (4) (芸州広島 諫活郎 行年二十八)  
遂に同月(天保十三年四月のこと一著者)十九日朝，通仙散を用う。熟睡に及んで刀を下す。右側瘤一塊を截出す。出血亦少なからず。(原漢文)  
(五月中旬に左側の腫瘍を摘出したが，この時の手術の記述には，「通仙散」の名称はない。)
- (30) (新町越後町 山城屋某婦信)  
「文久改元辛酉春三月二十四日，通仙散を与えて之を断ず。瘤を去りて縫合す。」(原漢文)とある。

「春林軒奇患図・北里本・下巻」<sup>12)</sup>においては，

「通仙散」の名称は唯一カ所に見られる。4丁裏に「芸州広島 諫活郎 行年二十八」の説明文があり、「遂に同月(天保十三年四月のこと-著者)廿九日朝、通仙散を用う。熟睡に及んで刀を下して右側瘡を截出す。出血亦少なからず。」(原漢文)でとあり、期日が「廿九日」となっている以外は、「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>に見られる文とほぼ同一である。

「合水堂治験」では、以下のように10カ所に全身麻酔関連の語句が見出される。(原漢文)

#### 卷之上

症例2. 4丁表：(丹波亀山 丸屋忠右衛門 右眼 瞼部の「眼胞菌毒」)

「師曰く。諾。すなわち通仙散を与え、亭午に至り、脉浮数、舌上乾燥、讒語呢喃、牀を摸る。」

症例4. 10丁表：(播州綱干 農夫與右衛門 右前腕の火傷後の肉芽)

「即ち、麻沸湯を與え、亭午漸く昏睡。」

症例5. 12丁表：(浪花新街 河内屋某婦子 外陰部の梅毒瘡)

「毒已に前陰に蔓延す。すなわち麻沸湯を与え、小湾剪刀を以って、尽く瘡根を刮去す。」

症例8. 21丁表：(摂州嶋下郡別府村 農夫與右衛門 右足甲部より尖端の脱疽)

「ここにおいて麻沸湯を与え、亭午に至りて、脉洪大、舌上乾燥、雙瞳開大、摸牀。以上麻沸瞑眩の候なり。」

#### 卷之下

症例1. 6丁表：(石州邇摩郡波積村 農夫健助妻 十七歳)

「五月十日早晨、麻沸湯ヲ服セシム。既ニ亭午ニ至ル。脉洪大、舌上乾燥、頭俱赤、雙瞳開大、人事昏忘、讒語呢喃、撮空摸牀。凡ソ麻沸湯ヲ用ル時ハ、必ス以上ノ症ヲ見ス。故ニ以下麻沸湯を与ト云モノハ必ス此症アリト推知ルヘシ。」

8丁表：「晡後ニ至テ、麻沸ノ瞑眩鮮メテ、正氣復ス。」

9丁裏：「十日早晨、麻沸湯を与え、午牌ムマノトキに之

を療す。」

以上見てきたように、合水堂における手術を記した3史料に全身麻酔薬に言及した箇所は、「麻沸」をも含めると合計13カ所で、その内「華岡家治験図巻第三」<sup>8)</sup>、「春林軒奇患図・北里本・下巻」<sup>12)</sup>の3カ所ではすべて「通仙散」、そして「合水堂治験」では10カ所に見られ、「通仙散」はわずか1カ所で、残り9カ所では「麻沸湯」ないし「麻沸」であった。

これから推察するに、合水堂でも一部の人のによってだけ「通仙散」の名称が唱えられており、合水堂全体で「通仙散」の名称を一斉に唱えていたのではないことが理解されよう。しかし、なぜ一部の人のみだけが敢えて「通仙散」の呼称を唱えたのかは分からないし、それを示唆する史料も今のところ発見されていない。これまでの研究によれば、「通仙散」に関する最も古い史料は仁井田好古が撰した「華岡青洲墓誌銘」であるから、遺族の一人である華岡南洋が何らかの理由で「通仙散」の呼称を唱え、これを仁井田好古が取り入れて、青洲の墓誌銘に採用したのであろう。青洲が開発し、そして命名した全身麻酔薬に別名を与えることが出来る人物は、青洲の近親者に限定されると考えられるから、青洲没後、近親者、そして合水堂関係者という条件を満たす人物は、華岡鹿城没後の合水堂を主宰した華岡南洋を措いていない。

#### おわりに

これまで知られていなかった図譜「合水堂治験」を紹介した。合水堂における13症例を解説し描いたものである。これらの症例は従来知られている「華岡家治験図巻第三」に記された症例とは重複しない。「華岡家治験図巻第三」の図は全く知られていなかったが、それらの中の10症例が北里大学東洋研究所図書館所蔵の「春林軒奇患図」に見出されることが明らかになった。合水堂では「麻沸湯」に加えて「通仙散」の名称も使用されていた。



摺筆するに際して図譜の閲覧に際してご高配を戴いた大阪市史編纂所（所長堀田曉生氏），北里大学東洋医学研究所図書館，小曾戸 洋先生（五十音順）に深謝の意を表する。

#### 参考文献および注

- 1) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂；1923. p.386.
- 2) 松木明知. 華岡青洲研究の新展開. 東京：真興交易医書出版部；2013. p.171-249.
- 3) 文献1. p.384.
- 4) 文献1. p.381-387.
- 5) 文献1. p.388-399.
- 6) 堀内 信編. 南紀徳川史（巻之百六十一）. 和歌山：南紀徳川史刊行会；1933. p.180-242.
- 7) 松木明知. 「乳巖治験録」中の4枚の手術図に関する一考察. 日本医史学雑誌 2016；62:295-304.
- 8) 文献1. p.402-408.
- 9) 文献1. p.388-411.
- 10) 文献1. p.174-178.
- 11) 文献1. p.504.
- 12) 簡単に「春林軒奇患図・北里本」について記す. 大きさは縦26.8cm, 横19.5cm. 四ツ目, 袋綴で, 現在の表紙と題箋「春林軒奇患図」は後で作られたもの. 原表紙は茶色で, 題箋を欠き「花岡経験奇患図上下」と表紙に直接墨書されている. 内題は「春林軒奇患図」である. 「上」巻は38丁で主として春林軒の症例を収め, 「下」巻は35丁で, 主として合水堂の症例を収めている. 「附録」は19丁で, 脱臼, 骨折時の整復法を描いたいわゆる「整骨・巻木綿」の図を収載している. 文中に記された期日から推察して, 1862年3月以降に完成した写本である. 請求番号はD5 H 28 1-3. 本図譜の概略については, 真柳 誠が第95回日本医史学会総会で発表している. (華岡流の図説書. 日本医史学雑誌 1994；40:80-81.)
- 13) 小川鼎三. 医学の歴史. 東京：中央公論社；1964. p.152.
- 14) 松木明知. 華岡青洲は“通仙散”とは書かなかった——“麻沸散”と“通仙散”の呼称の問題——. 麻醉 2015；64:1101-1105.

## On the Manuscripts Titled *Gassuido chicken*, *Hanaokake zukan Daisan* and *Shunrinken kikanzu*: A Comparison of Illustrations in These Three Manuscripts

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hiroasaki University Graduate School of Medicine

The two-volume manuscripts titled *Gassuido chicken* describe 13 surgical cases treated by Nan-yo Hanaoka in Gassuido, Osaka. They include 22 illustrations. The descriptions lack the dates when surgical operations were performed, except for one case. Six similar illustrations of three cases out of 22 are also found in another manuscript titled *Shunrinken kikanzu*. The word *Tsusensan*, meaning a general anesthetic, is used only once in the *Gassuido chicken*, while another word *Mafutsuto* is used as frequent as eight times. The manuscripts of *Gassuido chicken*, are important for elucidating the actual surgical treatment performed by Nan-yo Hanaoka in Gassuido.

**Key words:** *Gassuido chicken*, Nan-yo Hanaoka, Gassuido, *Tsusensan*, *Mafutsuto*